実地に見たコソボの現実

AMDA欧州担当顧問　小川　秀樹

アルバニア系が主人公復帰

表情明るい帰還民、復興に懸命

国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市）医療救援チームの一員として七月に三週間、コソボに滞在した。NATO空爆中にコソボで起こっていることについて危ぐされたことと、実際に自分の目で見たことの間には、当然ながらかなり差はあった。コソボ紛争の真実をよりよく理解いただくために、自分で見た現地の姿を伝えたい。

コソボには、マケドニアの首都スコピエから陸路入国し、AMDAが活動のベースにしているコソボ第二の都市プリズレンに向かった。三時間ほどの行程で、途中焼け落とされた家なども散見されたが、予想したほどの惨禍ではなく、その印象はプリズレンに到着するとさらに強まる。美しい古都のたたずまいがそのまま残っている。

プリズレンからもその地域に視察にはいった。今度はかなり被害が目に付く村々が続く。AMDAが診療所を開所したクルーシャという村だけで、二百人近くの犠牲者が確認され、その診療所でも地元出身の十人の葬式が営まれていた。さらにその北のジャコバという町では、旧市街が壊滅的な被害を受けていた。しかし一方で、すぐそばのモダンなホテルや高層アパートなどはまったくの無傷だ。破壊されたモスクとも相まって、アルバニア系住民の生活・文化体系に対する意図的な破壊であることは一目瞭然（りょうぜん）だ。

北東部に位置する首都プリシュチナはというと、郊外は別として、町なかの主だった建物に対する被害はなく、町並みはそのままだ。

今、最も緊張感があるのは北部の要衝ミトロビッツァであろう。もともと人口の八〇％はアルバニア系だが、残りのセルビア系が町を横断する川の北側に住んでいた。そして今や、アルバニア系の帰還と入れ替わるように、各地域から逃げ出したセルビア系が、続々とこの町の北側に参集している。

駐留するフランス軍が、南北を結ぶ橋の通行を厳重に管理し、まるで二分割された町のような印象を与えている。北側に家があるアルバニア系住民が橋を渡るのを拒否されるなど、混乱が続いていたが、両民族の間で平和裏に共存する合意が七月末には交わされ、問題は沈静化に向かっている。

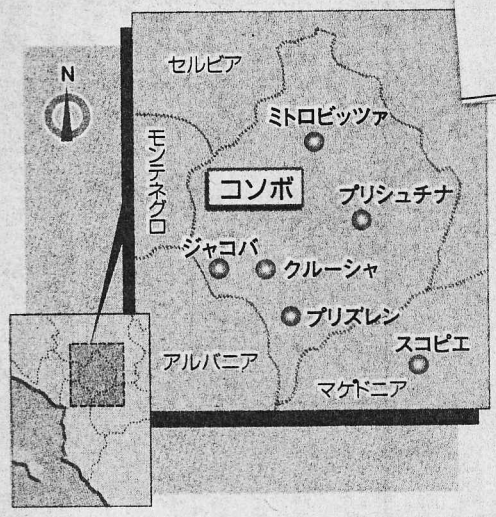
このように、コソボの惨禍を実地で見て初めて、NATO空爆の際にコソボで行われたこともおおよそ見当がつく。犠牲者の数は一万人を超えた。大変な数字だが、数週間で八十万人もの犠牲者を生んだ一九九四年のルワンダのように「虐殺の嵐」が吹き荒れたという状況ではないようだ。百八十万人口のうち、百万人以上が（避）難民として居所を逃げ出していることからも、確かにいえることは、アルバニア系をコソボから組織的に追い出す作戦が取られたということである。

今のコソボといえば、帰還民の表情は意外と明るく、本来働き者のコソボの人が皆、懸命に復興に打ち込んでいるという状況だ。何よりもコソボの人たちを鼓舞しているのは、九〇年以降、コソボのセルビア化が強行され、自治権がはく奪され、多くの人が職を追われてきたが、NATOの庇護（ひご）のもと、久々にアルバニア系が主人公に返り咲いたという事実である。

NATOの行動にはいろいろな評もあるが、コソボでは、今回の住民追い出しに終止符を打ったということとそれとは、まず、ここ十年に及ぶセルビアの圧政、蹂躙（じゅうりん）からコソボを救ったのであるから、NATOの人気は本物である。

コソボには今、欧米各国からの支援の手が差し伸べられている。しかしそれでも国際NGOの活動の立ち上がりはなぜか鈍いという。アルバニアで本格的な活動基盤をつくり上げていて、逆に六月のドラスチックな状況変化に対応できずにいるのかもしれない。

その点AMDAは、コソボ帰還の方向が定着した六月下旬にはいち早くコソボ調査を決行し、七月からはアルバニアで一緒に活動したコソボ人医師が帰還するのに合わせて、彼らの帰郷までを考慮に入れ、一緒に診療活動を開始し、何と三週間のうちに三カ所で診療活動を継続できたのである。地の利を生かして欧米のNGOが大挙して乗り込んでいるコソボでは、日本のNGOがそれらと競って物資支援を行うのではなく、こうした技能優先の支援活動に重点を置くのが大切かつ効果的かもしれない。



おがわ・ひでき　三井銀行総合研究所（現さくら総合研究所）などで海外調査に従事し、カンボジアや南アフリカ共和国などの総選挙で政府派遣監視員を務める。現在AMDA欧州担当顧問、さくら総合研究所客員研究員。岡山県鴨方町出身。現住所は横浜市青葉区。早稲田大政経学部卒。43歳。